

教員活動状況報告書

提出日：令和 4年 4月 6日
 所 属：生命・環境科学 部 学科
 氏 名： 江口 祐輔 職位： 教授
 役 職： フィールドワークセンター長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

2021年度に開設されたフィールドワークセンター長として、大学初となるサテライトキャンパスの運営を担っている。地域の課題と問題（動物との共生、獣害対策、地域の資源を活用した地域づくり）を研究と地域住民の実践による連携を身につけるフィールドワーク教育を行う。授業は、フィールドワークセンターにおける集中的な実習、本学へのリモート講義、本学に向いての講義を行う。また、フィールドワークセンターにおいて、動物行動学、獣害対策分野を中心とした卒論、修論の研究指導を行なう。

動物行動学を主としながらもその周辺分野についても理解を深めることで知識の裾野が広がり、より専門領域の発展性や応用性を高めることができる。「広い裾野なしに大山なし」を意識しながら、野生動物管理学・共生学分野での実践的ジェネラリストに必要な基礎知識と技能、思考力、分析力、判断力、表現力を講義・実習、卒業研究を通じて養い、さらには学生が現場の環境や住民の生活を肌で感じながら人と動物の軋轢に対する問題を発見し適切な解決方法を導く研究テーマを見出し実践できるようプログラムを提供したい。将来、研究者を目指す学生には、アカデミックに没頭するとそれ自体が特別なもの、高貴なものと勘違いする落とし穴にハマらないようにアカデミックは、幸せな LIFE を作るものであり、また、LIFE によって支えられていることを常に意識できるようになってもらいたい。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
地球共生論（各学科1コマずつ）	全学	必修	1年	526
生物多様性フィールドワーク演習（FWC実習）	環境科学科	自由	3年	14
リサーチローテーション（1コマ）	環境科学科	必修	2年	75
応用動物行動学（1コマ）	動物応用科学科	必修	2年	144

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

野生動物行動学および生態学を通して学生に自然科学だけでなく社会科学に対する興味を持たせ、学ぶ喜びや探究心を養い、環境保全やヒトと動物の共存などの社会的要請に応えられる広い視野を持った人材として社会へ巣立ってほしい。そのために、環境・動物・健康の専門分野を修学し、さらに、視野の広いジェネラリストとして役立つ人材を育てたい。

自ら考え・動くことのできる人材を育成するために、理解の促進と学びの定着を図り、あらゆる学びの場面で主体性を持たせるようにする。また、現場において様々な立場からの意見に触れることで多角的視点を持つことを習慣づけ、問題解決力を身につけられるよう考え、試行錯誤できる環境を与える。問題の本質を見極め、あるべき姿（ゴール）に到達するために必要なプロセスを設定できる能力を身に着けるようにする。そのためには、常に対象の動物や他者の視点からも物事を見つめることによって問題を理解できるようになってほしい。これらを養うために、特にゼミナールや研究室活動、地域活動を通じて、様々な背景を有する人々と触れ合い、広い視野を持ちながら多角的視点で物事を思考できる環境を提供する。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

講義に対する興味や好奇心を刺激できるよう、動画を利用して視覚的にイメージを定着させた上で、理論を説明する講義を行う。見易さ・理解し易さを重視し、学びの定着を図るため、学生自身のこれまでの経験や興味、共感できる内容と関連させながら新たな事柄を理解させることを心がけている。また、考える習慣を身につけてもらうため、講義中の口調は「伝える」だけでなく、学生へ「問いかけ」ながら講義を進行させることを心がけている。

講義科目に対して比較的興味が薄い学生もいるので、他の分野との関連性や、この分野を学ぶことで将来的に役立つメリットを伝えるようにしている。

フィールドワークによる、現場の問題解決能力の育成や研究スキルに関する教育については、地域環境や住民の意識を把握することから地域の問題を設定し、解決する手法を導くまでを実践できるようなカリキュラムを提供する。

過去の研究成果や地域の活動事例を理解し、将来のあり方について積極的に議論できようになっている。

フィールドワークセンターで卒業研究や大学院の研究を実施する学生には

基礎と応用の垣根なく、フィールドワークや実験的研究と現場対応を融合させた、問題の発見から解決手法の開発そして現場での実装までを意識した実践的研究手法を学べるカリキュラムを提供したい。

アクティブラーニングについての取組

大人数を対象とした講義では、オンデマンド式に加えて毎回の理解度確認や各自の意見を求める小テストを実施することで、学生の主体的な学びを誘導できると考えている。

<p><u>ICT の教育への活用</u></p> <p>理解を深めるため、研究活動の動画を利用した講義を行う。</p> <p>LMS を利用して講義後に理解度を確認するための小テストを実施している。</p>
<p>4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）</p>
<p><u>①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）</u></p> <p><u>②学生の理解度の把握（A～C）</u></p> <p><u>③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）</u></p> <p><u>④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）</u></p> <p><u>⑤双方向授業への工夫（A～C）</u></p> <p><u>※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）</u></p> <p>上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。</p> <p>本年度は担当講義がほとんどなかったため、次年度以降の授業の評価をもとに授業改善に取り組みたい。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p><u>①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p><u>② ①の結果はどうでしたか。</u></p> <p><u>③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>本年度着任したため、授業の機会が少なかった。今後は新規の授業が増えるので、学生授業評価を積極的に活用して学生の成長促進に向けた授業化の改善を実施したい。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p><u>① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p><u>（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）</u></p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>学生はフィールドワークを現地で活動するという抽象的なイメージのしか持たない場合が多いので、フィールドワークのあり方をより明確に理解できるように、さまざまなテーマについて意見交換をする機会を研究室活動として実施する。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>積極的な参加を心がけている。今年度はリモート講義の質の向上に役立った。TP の理念や作成の意義が理解できた。今後も積極的に FD 活動に参加していきたい。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>フィールドワークセンターにおける体験型の講義・実習をカリキュラムに導入したい。</p> <p>高度なりモート実習・演習システムを開発していきたい。野生動物の実際の生息環境を体験</p>

的に学ぶことが望ましいが、大人数が一堂に現場に入ると、環境を攪乱する可能性もある。一方、野生動物の細かい痕跡は、写真や動画では肉眼で見る奥行きを表現できないため直感的に理解することが難しい。そこで、技術成長が著しい、映像・通信技術を融合し、教室にいなから、生きた自然の教材をリモートで体験することができる映像システムを目指したい。

9. 添付資料（根拠資料）

- ・シラバス

*A4 4枚程度（A4 1枚(目安 1行40文字×36行1440文字)

- FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施 有・無 該当を○で囲む
- 下線部以外は今回新規追加した事項を示す。